

うひはたぶみ (初機踏)

H.A.M.A.木綿庵だより

第69号

2023(令和5)年7月26日

(編集発行 梅田正之 090-5042-7775)

大和機での4作品目

たてよこがすり
— 経緯緋:「ファイト」—

大和機(やまとばた)を用いて織った4作目の作品を、2年ぶりに織り上げることができました。整経長600cm。整経重175g。織り巾40cm。経糸数728本。織り上がりの長さ400cm。織り上げ重274g。織筈45度(9羽)。湯のし後の巾38.5cm。長さ386.5cm。重量272.0g。経糸は30番双糸。地糸に藍紺を用い、水色、薄ピンク色、茜色で縞を構成し、緋糸を入れました。緯糸は14番単糸で藍紺の糸と緋糸を用いました。作品としては10筋の縦縞と9筋の経緋に、緯緋が入る経緯緋となります。

今後の参考資料とするために、整経から織り上げまでの記録を以下に記しておきます。

経緋糸の整経は、2020年12月13日。経緋糸は4本×9筋で36本。ただし、36本では糸束が細すぎて括り難いため仮に100本を目安として4枠×5回×2(=40)+4枠×8回×2(=64)=104本としました。

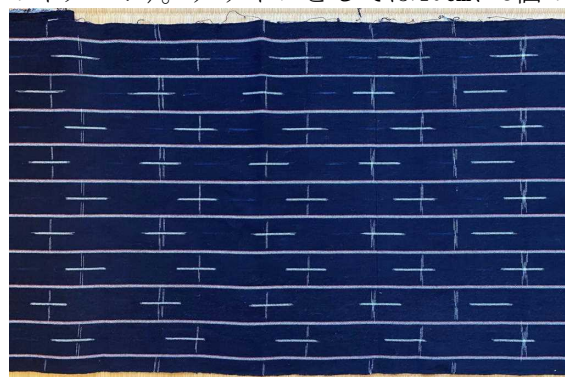
縞柄(しまがら)は1種類。水色2本、薄ピンク色2本、茜色(あかねいろ)2本。以上6本で1縞を構成します。縞は10筋のため6本×10縞で色糸は60本。720本から色糸60本と経緋糸36本を差し引いて地糸は624本となります。本来であれば両端合わせて1筋の縞が入る計算のため、1縞分6本を引いて618本。縞と経緋糸の間の地糸の列は20列となり、618本を20列で均等に配すとすれば1列30.9本となります。そこで30本×11列と32本×9列として計618本。なお、両端の1縞分の6本を2本と4本に分けて左右に配します。したがって右端列は30本+4本+2本取りの4本=38本、左端列は32本+2本+2本取りの4本=38本となります。30本×10列=300本、32本×8列=256本、そこに両端2列38本×2=76本を加えて地糸632本となります。色糸は3色×2本×10筋=60本。合計692本となります。

糸枠は、右から地糸4枠、茜1枠、薄ピンク1枠、水色1枠、地糸4枠の順で並べます。縞は1種類3枠しかなく、色糸3本のみで畦を取るのもったいないため、色糸3枠と地糸6枠の計9枠(18本)で1セットとしてこれを仮にAとします。地糸8枠(16本)で1セットとしこれを仮にBとし、地糸6枠(12本)で1セットをC、地糸7枠(14本)で1セットをDとします。このA、B、C、Dの組み合わせで整経を行いました。右端から BB(32本)、ACCCD(68本)…(ACCCDを計8回繰り返す)、A(18本)、BBB(48本)、A(18本)、BB(32本)。以上で計692本。ここに経緋糸36本が加わり総経糸数は728本となります。

次に緯緋糸の準備です。今回の緋は経緋の1柄飛ばしに×を描くような模様と、経緋の柄に×を重ねてトンボが羽を広げて飛ぶ姿をイメージしました(写真は後者のイメージ)。デザインとしては40cmに5個の×が入ることとなり、括り枠は1往復分の模様を入れることができるため、1周を10等分して糸を括りました。なお、緋糸は100本を1束にして括るため1束で200段となり、今回は予備を含めて緋糸を4束括りました。

整経後は冬季休館を挟み、巻き取り2021年3月22日。経緋糸の糊付け2021年3月25日。綜統通し2021年4月16日、19日。筈通し2021年10月3日、10日。機掛け10月10日。織り付け11月7日。織り上げ2023年2月27日。題名は「ファイト」。

終盤に経緋糸が外れるなどのアクシデントもあり短くなりましたが、足かけ2年半かかってようやく完成しました。



大和機で織った経緯緋(たてよこがすり)

----- Monthly Data -----

【天理やまのべ木綿庵】(問い合わせ件数 令和5年6月26日~令和5年7月25日)

茨城県1、京都府1

【H.A.M.A.木綿庵】(令和5年6月26日~令和5年7月25日)

メールを含む各種相談件数3、綿畑や作業場の見学を兼ねた事前申込済来庵者数0組0名



《綿の栽培記録 2023》－ 令和5年度版 その3－

天理市乙木町における梅田の感覚的気象観測データ(令和5年6月22日～7月23日)は、Livedoor Blog「綿の栽培記録」(H. A. M. A. 木綿庵のHPのホームページにもリンクあり)をご参照ください。

綿の花が咲き始めました。今年は、7号畑の和綿(松阪長谷川邱種)で7月9日に一番花を確認。洋綿では7月12日に1号畑の大和高田アブランドで同じく一番花を確認。7月末を前に開花盛期を迎えています。

ただ、綿木の背丈は全体として小ぶりです。元肥を入れなかったことが大きく影響しているものと考えられます。和綿は7月9日に60～70cmで摘芯。その後はどんどん側枝を伸ばしています。洋綿は7月16日時点で1号、7号畑ともにおおむね50～70cm。7月26日時点でおおむね60～80cmです。例年より明らかに小ぶりです(昨年同期の洋綿の平均は110cm)。牛乳パック栽培、鉢植え栽培の和綿、洋綿も次々と花をつけています。

写真は左から、1号畑の赤木、同青木、7号試験農場のアブランド&スーピマ交雑種、牛乳パック栽培の様子です。



《草木染め：カルカヤ。手紡ぎ糸の精練 — 令和5年7月23日》

カルカヤ(刈萱。正確にはメリケンカルカヤか)の乾燥葉140gを細かく刻み、10ℓの水に浸けて沸騰させ、60分間煮出して染液としました。2番液は採らずに、1番液のみを使用。染液を再度沸騰させて、その中にハンカチ、ランチバッグを投入、30分ほど煮沸して取り出し、絞ってから灰汁の中に1分程度浸け、あらためて染液に60分ほど浸し、再度灰汁に浸けてから水洗い。ハンカチの前処理にはディスポン(seiwa 木綿用濃染剤)を使用。ランチバッグは前処理を行いませんでした。

手紡ぎ糸の精練は、手紡ぎ糸186gを10ℓほどの灰汁につけて、徐々に加熱。沸騰状態で約30分煮沸し、取り出して天日干し。今回用いた灰汁はいずれもおもに刈り草の焼却灰。6月4日に大樽に水と灰を投入して攪拌、約50日後にその上澄み液を採ったものです。

写真左から：カルカヤの葉、染め上げたランチバッグ、精練中の手紡ぎ糸、天日で干しているところ、です。



【綿の加工の作業記録】 (梅田 1人の作業量)

・糸車を用いての糸紡ぎ量 (和綿：令和元年, 2019年産。丹羽正行氏による打ち綿)

令和5年6月26日～令和5年7月25日 (作業実日数17日) 糸の総量20.1g (5.4匁) 総時間2時間27分

※1分間≒0.137g 1時間≒8.2g (2.2匁)

【研修等の記録】

・令和5年07月01日 田原本町の農場生産研究所におけるスイカ採種作業等の手伝い(パート)契約更新